©日本カムリ学会 2014
Cylchlythyr 35:4-8

# 寄稿、紀行、聴こう
# ケルズ・ダントの思い出

小 池 剛 史

今から 20 年以上前の話しであるが、学部生として初めてカムリに留学した時の思い出を記そうと思う。最近、カムリの伝統的な音楽、特にケルズ・ダントなる音楽に関心を持ち始めたのだが、私はカムリ留学時にこのケルズダントを、プロ音楽家と共にやっていたことに最近になって知ったのである。

カムリ中南部の大学町、サンベドル・ポント・ステファン（Llanbedr Pont Steffan; 英語名 Lampeter）に留学したのは 1992 年夏～1993 年夏の一年間であった。この間、良き先生たち、町の人々、友人らに恵まれ、しっかりカムリ語を学ぶことができた。町の教会の聖歌隊に入っていた関係で、教会の牧師の家族とも親しくなった。初めて外国で迎えた誕生日に、牧師の息子さんが贈り物としてある音楽カセットテープをくれた。それは、ハープ奏者のデリス・メディ（Delyth Medi）という女性が、自分で演奏し歌ったものを録音したものだった。貰ったその日からそのテープを聴いてみた。初めて聴いたアル・ラン・ア・モール（Ar Lan y Môr：(カムリの有名な民謡)）、子供向けの音楽、マヴァヌゥイ（Myfynwy）などの恋歌が、デリス・メディのチェロのような美しい声と心の籠ったハープ弦の響きにのせて歌われていた。どの旋律も当時の自分には新鮮で魅力的であったが、その中である一曲だけは特に心を惹かれていた。その旋律は、あたかも山奥の暗闇を想像させるような暗い調べなのだか、同時に一抹の希望の光を与えてくれるようであった。パッケージを見ると、題名は “Tangnefeddwyr” 「平和をもたらす人々」とあった。この表現は、新約聖書のマタイ伝 5 章にある「山上の説教」の一部で、9 節の「平和を実現する人々は幸いである」に現れる表現である。この題目と旋律の組み合わせが何とも言えず益々好奇心を掻き立てられ、一体どんな歌詞なのかをどうしても知りたくなった。そこで町内の学校の校長をされているある方―お名前は失念した―の門を叩き、テープを聴いて歌詞を教えてほしい、とお願いした。今考えると無茶なお願いをしたと反省しているが、それでも先生は承諾して下さり、家の中に招き、一緒にそのテープを聴いた。

私はその曲を聴いている間の先生と奥様の様子が今でも忘れられない。詩の言葉に恍惚としているのだ。その曲が終わると先生は「今すぐ私の学校に行こう」と仰った。学校の校長室にご案内頂き、本棚から一冊の詩集と取り出し、その中のあるページをコピーし、私に手渡した。それはワルドー・ウィリアムズ（Waldo Williams:1904 年-1971 年）という詩人の *Dail Pren* という詩集だった。先生は説明してくれた。「ワルドーはクウェーカー教徒で平和主義者の

©日本カムリ学会 2014


男でね。…第二次世界大戦中、アベルタウェ（Abertawe：英語名 Swansea）がドイツの爆撃に合って町中が焼き野原になったんだ。人々の心はすさみ、家財を失った人々が崩れた他人の家屋や店から物を盗み合うような時代だった。ワルドーはそんな町を眺めながら、平和主義者だった両親を思い出して、この詩を書いたんだ」。この説明を聞いて私は自分でこの詩を読みたくなった。その当時の私のカムリ語力では到底読めない文ばかりであったが、教会の家族の方やカムリ語話者の友人らの助けを得て、何とか読んでみた。

**Tangnefeddwyr　　平和をもたらす人々**

| | |
|---|---|
| Uwch yr eira, wybren rhos, | 雪を覆う　桜色の空 |
| Lle mae Abertawe’n fflam. | アベルタウェの　燃え盛る時 |
| Cerddaf adref yn y nos, | 私は夜もすがら　帰り歩く |
| Af dan gofio ’nhad a ’mam. | 父と母を　思い出しながら |
| Gwyn eu byd, tu hwnt i glyw, | 幸いなるかな　その声は聞こえぬが |
| Tangnefeddwyr, plant i Dduw. | 平和をもたらす人々　神の子らよ |
| | |
| Ni châi enllib, ni châi llaid | どんな悪口も　中傷も |
| Roddi troed o fewn i’w tre. | 母のいる町では　足を踏み入れられなかった |
| Chwiliai ’mam am air o blaid, | 母は罪人をみるといつも |
| Pechaduriaid mwya’r lle. | その人を守る言葉を　探していた |
| Gwyn eu byd, tu hwnt i glyw, | 幸いなるかな　その声は聞こえぬが |
| Tangnefeddwyr, plant i Dduw. | 平和をもたらす人々　神の子らよ |
| | |
| Angel y cartrefi tlawd | 貧しい人々の家を　守る天使が |
| Roes i ’nhad y ddeuberl drud: | 父に二つの真珠の教えを　授けてくれた |
| Cennad dyn yw bod yn frawd, | 人の使命は　兄弟になることだと |
| Golud Duw yw’r anwel fyd. | 神の富は　目に見えぬ世界であると |
| Gwyn eu byd tu hwnt i glyw, | 幸いなるかな　その声は聞こえぬが |
| Tangnefeddwyr plant i Dduw. | 平和をもたらす人々　神の子らよ |

©日本カムリ学会 2014
Cylchlythyr 35:4-8

| | |
|---|---|
| Ceneddl dda a chenedl ddrwg - | この国は良い　この国は悪いなどと言うが |
| Dysgent hwy mai rhith yw hyn, | そんな考えは幻想であると　父母は教えてくれた |
| Ond goleuni Crist a ddwg | キリストの光は　信じる者すべてに |
| Ryddid i bob dyn a'i myn. | 自由を　もたらすのだと |
| Gwyn eu byd, daw dydd a'u clyw, | 幸いなるかな　その声に耳を傾ける日は |
| Dangeneddwyr plant i Dduw. | 平和をもたらす人々よ　神の子らよ |

| | |
|---|---|
| Pa beth heno, eu hystad, | 今宵　一体どうなるのか　父や母の声は |
| Heno, pan fo'r byd yn fflam? | 世界中が炎に包まれる　この夜 |
| Mae Gwirionedd gyda 'nhad. | 父は真理を　知っていた |
| Mae Maddeuant gyda 'mam. | 母は許しを　知っていた |
| Gwyn eu byd yr oes a'u clyw, | 幸いなるかな　その声に耳を傾ける時代よ |
| Dangeneddwyr, plant i Dduw. | 平和をもたらす人々よ　神の子らよ |

私はこの詩が大変気にいった。特に 3 連目の「この国は良い国、この国は悪い国と言うが、そんな考えは幻想である」とある箇所に心を惹かれた。当時私は、カムリの人々は己の国家をしばしば偏狭的に愛するがあまり、他の国々、特にイングランドを「悪い国」と決めつけるところがある―と思うことがあり、うんざりする時もあった。そんな時にワルドーのような詩人がカムリにおり、キリスト者の立場で「信じる者には誰にでも自由を与えるのだ」と述べているのを見て、大変安心したのを覚えている。

私がこの詩を気に入って口ずさんでいるのを見た牧師の家族は、何と私を、この曲を作曲した方に紹介して下さったのである。その方はレイ・モルガンさん（Ray Morgan）と言い、サンベドルに在住の老婦人であった。牧師さんのお宅にモルガンさんがやって来て、ピアノの前に座り、「さあ、やりましょうか」とテープの音楽と同じ旋律を弾き始めた。この時私は知らずに、生まれて初めてのケルズ・ダントという音楽（ただしピアノで）をやったのである。

カムリ学会会員の永田喜文氏著『ケルトを旅する 52 章』（明石書店：2012 年）に、ケルズ・ダントが次のように説明されている。「…ウェールズでは歌とハープの関係は深い。実際にケルズ・ダント（「弦の音楽」の意味。ここで弦はハープを指す）と呼ばれる、ウェールズ語の詩とハープのためのウェールズ独自の音楽が存在する。この形式は 14 世紀から 16 世紀の間に形成され、発展した。」「ハープが奏でる曲に関して、二つの特徴がある。ひとつ、曲は伝承歌でも新たに作曲された曲でもよいが、詩の本質を音で表さねばならない。ふたつ、ハープは詩のメロディの対旋律を奏でなければならない―ケルズ・ダン

©日本カムリ学会 2014
Cylchlythyr 35:4-8

トは主旋律と伴奏から成る音楽ではなく、主旋律と対旋律が奏でる音楽なのだ。従って歌とハープが別個の曲を同時に奏でるため、どこかアンバランスで、浮遊感があるように聴こえてくる。だが注意深く聴けば、それが微妙なバランスで互いに響き合っていることが分かるはずだ…」（同書 pp107）。モルガン氏と歌った際には気付かなかったが、その時の演奏を今聞いてみると、確かに私はピアノの旋律と全く異なる旋律を歌っている。デリス・メディは自分でハープを一つの旋律を弾きながら、同時に全く別の旋律を歌っていたのである。

2011 年夏のアイステズボッドで偶然デリス・メディさんご本人にお会いした。感無量であった。現在はカエルディーズ（Caerdydd:カーディフ）の学校で音楽を教えておられるとのことだった。また、レイ・モルガンさんはかなり前に亡くなられたことも聞いた。

1992 年の大学生としてのカムリ留学では、若気の至りで色々なことを経験したが、知らぬ間に古くから続く奥深いカムリ伝統文化―文学と音楽―に触れていたことを考えると、何と自分は幸運なのかと思う。これからは自分が経験するだけに留まらず、カムリの奥深い文化を言葉と行動で日本に伝えられるよう努めたい。